

氏名	武 谷 嘉 之
学 位 の 種 類	博 士 (経 済 学)
学 位 記 番 号	第4239号
学位授与年月日	平成15年 3 月25日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当者
学 位 論 文 名	近世下級建築職人の組織と労働
論文審査委員	主 査 教 授 大 島 真理夫 副主査 教 授 玉 井 金 五 副主査 助教授 長谷川 淳 一

論 文 内 容 の 要 旨

近世の下級建築職人である大坂の家作手伝に関して賃金、生活、仲間組織などを多角的に検証した。家作手伝とは簡単にいって足場を組み、多様な雑務をになう比較的熟練度の低い建築職人である。近世大坂における建築の現場では不可欠の存在であったにもかかわらず、これまでほとんど知られることはなかった。本論文ではこの家作手伝を中心に下層建築職人の仕事内容、労働環境、組織等を明らかにした。筆者の中心的な問題関心は生活水準にあるが、本論文は前近代の労働を初めて具体的に明らかにした点で労働史の観点からも重要な意義がある。まず第1章「手伝職仲間の形成過程」では家作手伝の全体像を概説した後、彼らの仲間が結成された経緯・要因、さらに株仲間化していく過程を詳述した。家作手伝としての信用を身につけ、相互扶助を実現することが重要な動機であり、他の職種との職分争い、四天王寺との関係などが大きな要素である。第2章「手伝職仲間と地域」では天保期に起こったある事件を素材に家作手伝の営業範囲、在方の手伝との関係などを検討した。またこの事件は家作手伝職仲間が株仲間していく契機ともなった。第3章「手伝職仲間の組織と運営」では嘉永期の手伝仲間規約を主な素材として、手伝職仲間は「組」を単位とした連合体であること、四天王寺の支配を受けているが相当に独立性の高い仲間であることを指摘した上で、「組」が手伝の経営に大きくコミットしていること、「助方」と呼ばれる手伝を管理していたことなどを明らかにした。第3章の後に補論「近世における職人集団の組織原理とその特質」を述べた。日本の株仲間はヨーロッパのギルドなどと比較して自律性に欠け、領主の力が強かったという説に対して、一般的にはそうであるが、手伝職仲間のように一方的な支配を受けていたとはいえない仲間の存在を指摘し、相互依存的関係として捉える方がよいことを示唆した。第4章「手伝の労働実態と賃金の決定過程」では鴻池家の建築記録に依拠して家作手伝の具体的な労働実態について分析した。その結果職人の賃金は通説とは違い固定的なものではなく、極短期間のうちに施主と職人の間で何度も交渉が持たれ変化していくようなものであることを明らかにした。また施主側が労働時間を決定し、管理している事例を示し、近世の労働のあり方について見方を大きく変える必要があることを示唆した。第5章「近代への展望」では明治の手伝業仲間について近世との連続と断絶の両面から検討し、大正期においては仲間が崩壊し、仕事を請け負う経路が変わってしまったことを述べた。また近代における熟練労働者と単純労働者の賃金の格差と変動を図示し、二重構造論の所在についても言及している。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

以下の理由により、上記論文は課程博士の学位の授与に値すると判断する。

(1)全く空白であった近世大坂における「手伝」の仲間形成とその労働実態に関する開拓者的研究であり、大阪市立大学学術情報総合センター所蔵日本経済史史料、四天王寺文書、鴻池家文書などの一次史料にも

とづいた、実証的研究である。

(2)商人仲間に比して研究が手薄であった職人仲間に関する研究であり、近世の仲間組織研究に貴重な貢献となった。営業の独占確保を目的としない、出職の職人仲間形成の事例を明らかにした。

(3)家や親方組織を形成しない不熟練労働者たちが、仕事上での信用保証、相互扶助のために組織形成を行っていたことの分析を通じて、近世の都市下級職人たちの生活安定への努力の一端を明らかにした。近代における労働組合組織の形成原理と近世の職業集団の関係について、新たな視角を提供した。

(4)鴻池家の事例研究を通じ、季節や時間による割増を含む賃金現実の賃金計算方法、線香の燃えた長さで計測した絶対時間による労働時間の管理など、これまで全く知られていなかった知見を学界に提供した。固定的な公定賃金というイメージや、不定時法のもとで、時間決めではなく課題本位のルーズな労働という、工場制度以前の労働イメージに対し、反証を提出した。

(5)限られた史料を依ってではあるが、明治以降における手伝い仲間の変化をたどり、第1次大戦期における終局的変化を明らかにした。